

キリスト教神秘主義者の信
仰における病と救いについ
て 第4 部



Maria Maddalena de Pazzi
の恍惚



小泉友美 KOIZUMI
Tomomi



目次

マリア マッダレーナ デ パッツィ Maria Maddalena de Pazzi(1566-1607) の恍惚	1
---	---

マリア マッドレーナ デ パッツィ Maria Maddalena de Pazzi(1566-1607) の恍惚

マリア マッドレーナ デパッツィは 1566 年にイタリア国フィレンツェ生まれで、祖先は第 1 回十字軍遠征のメンバーで、幼少期より敬虔で祈りに満ちた生活を送っていました。霊的指導者兼聴罪司祭はイエズス会士であり、僅か 10 歳で初めての聖体を預かり、12 歳で神秘的な恍惚状態を経験しました。

1944 年 11 月 1 日にカルメル会修道院に入会して、マグダラのマリアという宗教名をいただきました。修道女となって、重病を患って 40 日間恍惚状態に陥りました。晩年、断食と激しい苦行で疲れ果てて、病に倒れて最後の 3 年間で苦しみの中で過ごしました。1607 年 5 月 25 日、41 歳で亡くなり、1626 年に列聖。

1584 年に刊行されました " 四十日間 Quaranta giorni " の著作には、幻視、幻聴による恍惚経験が描写されています。

キリスト教精神史における恍惚について

旧約聖書の " サムエル記上 " と " エゼキエルの書 " 内において、恍惚体験は主に国家の使命を受けた預言者達に神霊が降って預言をするという表現がされています。

恍惚はギリシャ語で ek-stasis (自分より外へ出るという意味) で、人間の身体より出た魂を示し、厳格な修業生活においておこる現象です。

" サムエル記上 10,10 " 内のペリシテ人の守備隊がいるギブア エロヒムに向かうサウルは、町に入る時、琴、太鼓、笛、豎琴を持った人々を先頭にした預言者の一団に会い、カミはサウルのところを新たにされ、神霊が彼に激しく振り、サウルは彼らのただ中で預言する状態になりました。この神霊がサウルに降りて預言をする恍惚の状態を得たことを動なる恍惚といいます。

また、" エゼキエル 12,1 " 内で、預言者エゼキエルが神霊によって導かれて、幻の内に捕囚の民の元へと連れて行かれました。そして、" 主の言葉がわたし (エゼキエル) に臨んだ。 " (12,1) この預言者エゼキエル自身が行動しなくても、外部の神霊よりおこってくることを、静の恍惚といいます。

新約聖書の " コリントの信徒への手紙二,12,1-4 " においては、旧約聖書の政治的使命感の要素は無く、使徒パウロの証言である 1 人の知人のキリストの使徒の恍惚経験を語ります。

" 体のままか、体を離れてかは知りません。カミがご存じです。(…) 彼は楽園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。 " (12,1-4)

神霊によってその人の身体は天上へと引き上げられて、不思議な言葉を耳にしたという神秘体験です。この体験は、キリスト教徒としての恍惚の体験といえます。

この様に、聖書における恍惚の体験とは、神霊がその人の心身に直接降りて (病気の状態でなくても) おこる事として記されておりますが、今回紹介いたします 16 世紀イタリアの女性神秘主義者の恍惚体験とは、心身における動揺と不安な病の状態において引き起こされる現象として表現されているように思えます。幻視や幻聴として表現されています。

そして、この恍惚の状態は次第に脱魂というカミと合一した神秘的境地に行くように思えます。苦しみの果てに得られる魂の救済でしょうか？

その点に注目しながら、翻訳して、マリア マッダレーナ デ パッツイの恍惚状態を、1584 年 5 月 27 日、

5 月 28 日、5 月 29 日、6 月 6 日、6 月 14 日の記録を選んで、紹介してゆきたいと思います。

1584 年 5 月 27 日 聖三位一体の祝日の最初の恍惚 キリストの御姿の幻視

1584 年 1 月から 3 月まで、2 か月間にわたる重病の苦しみと努力も実らず、すべての医者に見捨てられて、絶望感と悲しみにこころは満たされました。

“主は私と心身においてひとつとなるために、この滅びゆく肉体は打ちのめされましたが、それでも精一杯愛する主の元に向かって行きたいと思います。”

告解士は私に、心身の病の苦しみゆえに、ベッドに横たわるように言いました。疲れた目を休ませるように、カーテンを引いて部屋を真っ黒にしました。咳をして“Ave アヴェ”と祈りました。するとベッドの横にキリストの御姿の幻視が顕れました。キリストの御顔は美しく、小麦色にこんがり焼け、私の両眼はキリストの十字架に向けられました。魂の最良の薬とはこの十字架です。キリストは私の為に憐れみ、苦しみました。このあまりにも大きな愛は、人智では理解できません。

キリストの愛の眼差しは、私の弱さを励ましてくださいます。

この 1584 年 5 月 27 日の最初の恍惚により、次々と幻覚、悪霊の影響による欺瞞に苛まれる経験が重なりました。この 1 回目の恍惚の後、“何も思い出す事ができません。”どのようにこの恍惚体験を節得する為の言葉を思い出す事もできません。”

その後、頻繁に恍惚の体験が起こり、その記録を記しました。そして言葉にしてようやく理解する事ができました。それは、キリストの慈愛に任せるままに、その純粋なこころを愛してゆく事です。

1584 年 5 月 28 日のキリストの受難を通しての恍惚

聖体拝受後の月曜日の朝、キリストの言葉を識りました。

“私は道であり、真理であり、命です。私を通らなければ誰も父の元に行くことができない。”(ヨハネによる福音書 14,6) このキリスト受難の教えの道を通らなければ、誰も御父の元に行くことができません。そして誰も救われることはありません。この受難は、聖女マグダラのマリアのキリストへの恋情の例を通して幾度も繰り返される言葉、愛そのものであること。受難への愛の観想は、こころの奥底にしみこんでゆきます。このキリストの受難を通しての大きな恍惚は、次第に深い愛に満ちてゆきます。この愛の観想の中ですべてが去ってゆくこと、そしてすべての人々がこの愛によって満ちてゆきます。この聖なる愛を通して、若い時の情熱を思い出される事もあります。

すべての人間は生きることで、カミの指で奏でられる音楽楽器となり、最高のメロディーを歌うことができます。

1584 年 5 月 29 日の恍惚と魂の 3 つの才能と愛の飛躍

火曜日の朝、魂の 3 つの才能について。

1 つ目は知性。カミによって創られた知性によって、カミの存在をより良く識ること。

2 つ目は記憶。カミの恩恵とキリストの受難を思い出す為の記憶、そして、私達の魂の記憶。

3 つ目は意志。カミの意志と合致するように。盲目的に苦しめないように。

この魂の 3 つの知性、記憶そして意志の才能とは、“愛の飛躍の恍惚”の経験の中で生まれてゆきます。この“愛の飛躍”の中で" 俗世の喜びなど必要ない。俗世の喜びなど必要ない。ただカミのみこの地上において偉大であります。" と何度も何度もこの言葉を繰り返して言います。

私をキリストと共に生きており、私のこころは燃えさかってゆく炎、燃えさかってゆく矢、そして燃えさかってゆく光線そのものです。この燃えさかるこころ(魂)とは、群魂でもあり、この魂は切望し息を吹きかけて、そして息をします。

この愛の飛躍とは受難の試練そのものであり、辛い試練を通しておのれの意志と共に死に近づいて、カミのみに委ねてゆきます。この厳しい試練とは魂の渇きであって、魂がカミと結びつく事が出来るように、謙虚な美德とおのれの憔悴、おのれの消滅の道程そのものであります。

そしてこの受難の体験の後に、美德を得て永遠のいのちを得る為に、魂は様々な罪より解放されます。

この魂の象徴すべきイメージとは、牛乳、血、庭、そして水であります。キリストの神秘のイメージ、眼差し、光、輪、河、葡萄、泉、海が言語表現化されてゆきます。キリストは驚異的な愛そのもの、魂が休まる場所、そして果てしなき神性なる海原そのものです。この 40 日間にわたる恍惚において、1 日において 14 時間続く幻視とは、豊かな言葉、画、映像、動き、そしてキリストの受難そのものであります。次に視覚的表現が終わり、聴覚的表現である声が聞こえて、さらなるうっとりとする恍惚をへて、精神の集中が起

こります。そして、魂の治療による回復がありました。

1584 年 6 月 6 日 恋人としてのキリストの幻視と庭

聖体拝受後に惚れっぽいキリストを幻視しながらこう祈りました。

" 私はあなたにこの心身を捧げました。今、私がキリストの元で結ばれますように願います。 "

その後、とても美しい広々とした庭へと私は歩いて行き、花冠を両掌で編んでゆき、この花冠は純白、紅色であり、その他の花卉は様々な色が混ざった斑で彩どられていました。天使達が黄金の糸で花冠を僅かな糸で編み込んでゆきました。それは恩恵の象徴です。キリストが私の御前に顕れて言うには、

" もしも慈愛がなければ、天使達は花冠を編んでゆくことは出来ません。生花に替わる最高の糸とはカミの慈愛そのものです。 "

どうぞ私をカミの御意思によって生かしてください。天の御父は他の花冠のようなものではなく、その慈愛のゆえに黄金の冠となります。この庭内にあります 2 つの通りとは、その 1 つ目の通りはキリストの御心の中にあり、美しい泉があってその湧き出した水はカミの創造物である私達に 2 つの恩恵をもたらします。1 つ目は涼しくする効果であり、2 つ目は温くなる効果です。この傲慢さという燃え盛る火を冷やしてカミの愛によって、温めてゆく事ができます。

1584 年 6 月 14 日 驚異的な恍惚と病の回復

6 月 12 日朝方より、" 純粋な愛 " の幻視を体験しました。この聖体を通してのカミの愛とは無上の悦楽であり、無上な魂は純粋な愛を探し求めます。愛という言葉を繰り返し吟じます。

" 愛よ、愛よ、カミよ、愛の創造物を愛するカミよ。純粋なるカミよ、愛のカミよ、愛のカミよ。 "

すると言葉が返ってきました。

" 愛しい娘よ、私のところが純粋になってゆき、ようやくこのところを天の永遠なる御父にお渡しいたしましょう。 "

そして、6 月 14 日に驚異的な花冠の幻視の経験をしました。

2 つの王冠があり、1 つの王冠は茨の棘の王冠で、2 つ目の王冠は花冠です。そしてこう問いかけられました。

" どちらの王冠がお好きですか? "

" 私は愛のみで充分です。 "

すると、笑いながらキリストは私に花冠を選んでこう言いました。

“貴女にこちらの王冠を与えましょう。”

私は花冠を両手で押し返し、

“いいえ、いいえ、この花冠ではありませんよ。”

するとキリストは私に茨の棘と羽のついた王冠を私のところにくださいましたが、花冠は後程くださるとおっしゃいました。この愛によって不足するものは何もあります。私は悪霊から護られる最大の武器があります。愛は鎖を持って縛られて、この愛はあまりにも強力で私自身を負かしてゆきます。

キリストは、私にこの俗世においての苦しみのはての逃げ場を与えてくださいました。それは愛という要塞であり、カミの愛と脅えるところは共に生きる事はできず、すべてはカミの愛によって任せるままにしました。

この体験後、病いは回復してゆき、以後も恍惚の体験は7月、8月と続いてゆき、恍惚の経験とは天国へと歩んでゆく信仰の道であることと強い自覚を持つ事が出来たのでした。

完

キリスト教神秘主義者の信仰における病と救いについて 第4 部

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
